

鳩間島の祭祀と文芸：結願祭を中心に

著者	大城 学
雑誌名	沖縄文化研究
巻	10
ページ	228-303
発行年	1982-10-20
URL	http://hdl.handle.net/10114/00015594

鳩間島の祭祀と文芸

—— 結願祭を中心に ——

大 城 学

I 御嶽と祭祀組織

沖縄諸地域と同様、鳩間にも島内に数か所の△御嶽▽が存在している。島の人たちは、それを△ウガン▽と呼称している。△ウタキ▽ということはない。

島内には、トウムリ（友利）、ピナイ（比納。鬚納）、ニシドー（ニシトーともいう。西堂。西糖）、アラカ
ー（新川）、マイドゥマリ（前泊）の五か所のウガンと、フナバル（舟原）、パマザキ（浜崎）の二か所の拝
所が存在している。

1 トウムリウガン

『琉球国由来記』⁽¹⁾に、

友利御嶽

神名、ヲトモリ

御イベ名、大ザナルガネ

とある。

鳩間島では、最も古いウガンである。鳩間を建てたという英雄・儀左真主^{ぎさましゅー}が創設したウガンであるといわれている。各ウガンの中で最高位にランクづけされ、他の全てのウガンの△神▽の存在する場所であると考えられている。トウムリウガンには、他のウガンの香炉が置かれており、祭祀や儀礼もそこでのみ行われるものが多い。トウムリウガンで祈願することは、他の全てのウガンでの祈願に相当する行為であると考えられている。

2 ピナイウガン

『琉球国由来記』⁽²⁾に、

ヒナイ御嶽

神名、フチコハラ

御イベ名、イリキヤニ

とある。『琉球国由来記』に記載されている鳩間島の御嶽は、前述の△友利御嶽▽と△ヒナイ御嶽▽の二御嶽のみである。このことは、友利、ヒナイの両ウガンが他の三ウガンよりも早くから集落のウガンとして成立したものと思われる。

ピナイウガンについては、次のような成立伝承がある。

対岸の西表島ヒナイ集落では、地味が肥え、農作物が豊穰であった。この稔り豊かなヒナイ集落の御嶽の香炉の灰を分けてもらい、鳩間島にウガンを建てようとしたが、ヒナイ集落の人たちに拒否された。そこで、夜、二隻の舟を出してヒナイ集落に出かけ、香炉の灰を取り、ヒナイ集落の人たちに気づかれないように急いで逃げ帰って、島に到着するやいなや、海岸端に香炉を設置し、線香を立てて祈願をした。これがピナイウガンである、という。二隻の船頭をつとめたそれぞれの家からサカサとティジリビの神職が生まれている。豊年祭の爬竜船競漕（パーレー）は、このときの様子を演じたものだという伝承もある。

3 アラカーウガン

鳩間島では、豊年祭の旗頭を保管している家のことを△トゥニムトゥ▽と称している。トゥニムトゥは東西両集落にあるが、⁽³⁾アラカーウガンは西村のトゥニムトゥと関係がある。また、雨乞いの祭祀

とも関係がある。

西村のトゥニムトゥの祖先が、早ばつが続いたので兄妹でウガンを建てて祭儀を行ったら雨が降り、作物も稔った。島の人たちはそれにあやかり、アラカーを集落のウガンとした。さらに、西村のトゥニムトゥの祖先は豊穰をよこび、雌雄の旗頭をつくった。のちに、日ごろ親しくしていた東村のトゥニムトゥの祖先が雄の旗頭を譲り受けた。

4 マイドゥマリウガン

航海安全のために建てられた△旅ウガン▽の機能をもっている。

沖縄本島の人に乗っていた船が難破して、マイドゥマリウガンの前の浜に漂着し、救助された。それで、そこにウガンを建てて神に無事を感謝し、以後そこを拝むようになった、という伝承がある。

5 ニシドーウガン

島建て英雄・儀佐真主の墓所であるといわれている。しかし、十年くらい前からサカサもティジリビーもおらず拝んでいない。ウガンとして機能してないのである。

現在、鳩間島ではニシドー以外のウガンが集落のウガンとして機能している。

各ウガンには、女性神職△サカサ▽（司、巫女）と、サカサを補佐し、さらにウガンの清掃などの雑務も行う男性神職△ティジリビー▽が一名ずつ就任している。ティジリビーは「手摺り人」、つまり、両手を合わせて（合掌して）祈願する人の意であろう。サカサとティジリビーの下には、祭祀や儀礼の際に、献饌の用意をしたり、線香を立てるなど、特に、サカサの手足となって働く、女性二人からなる△バキサカサ▽（脇サカサの意か）がいる。

トゥムリウガンでは、料理をつくったり、神酒を用意したり、諸準備をする小屋があり、それを△ポーチャーヤー▽（包丁屋）と称している。屋根は草葺きの切妻で、壁はない。奥行き一間半、横二間の広さである。煮炊きするカマドは、小屋の内に二つ、外に一つ設置する。水は境内にある貯水タンクのものを使用する。ここでは男性三、四名が仕事をするが、彼らのことを△ポーチャーヤーシンカ▽（包丁屋臣下、衆）という。女性がポーチャーヤーに出入りすることは忌みきらわれ、禁止されている。

Ⅱ 結願祭

鳩間島において、旧暦三月に行われる△世願い▽と、旧暦六月に行われる△豊年祭▽、そして、旧暦九月に行われる△結願祭▽は、代表的な祭祀である。

結願祭は、一年間の△願解き▽の祭祀である。鳩間方言では△キチゴン▽という。旧暦九月の壬

の日から三日間にわたって行われる。三日間の祭儀は次のように呼ばれている。

初 日―ユードゥーシ（夜通し）

二日目―トーピン（当日）

三日目―トウジミ（終結）

1 ユードゥーシ（夜通し）

夜を徹しての祭儀である。トウムリウガンのウブヤー（大家）において、厳粛にとり行われる。祭儀は、 \wedge ユネンヌパイ \vee （夕方の拝、祈願）、 \wedge ユナカヌパイ \vee （夜中の拝）、 \wedge シトウムティヌパイ \vee （朝の拝）と三回行われる。

ポーチャーヤーでは男たちが、お昼ごろから料理をつくり始める。夕方六時半ごろ、バキサカサが来て、祭儀の準備をする。不足のものがあれば、バキサカサはポーチャーヤーの者に言いつけて用意をさせる。

献饌は \wedge バキトウリブン \vee と称する幅一尺、高さ二寸五分、長さ三尺ほどのお膳に並べられる。バキトウリブンはウタキの数だけ用意される。献饌のうち、吸い物の中身が豊年祭と結願祭では違う。

豊年祭（五品）		結願祭（七品）	
①	シブル（冬瓜）	①	マンジュナル（パパイヤの実）
②	クブ（昆布）	②	クブ
③	トーフ（豆腐）	③	トーフ
④	カマブク（食紅で染めたカマボコ）	④	カマブク
⑤	シンス（油で揚げたカマボコ）	⑤	シンス
		⑥	ムチ（餅）
		⑦	マーミナ（もやし）

結願祭の場合、④、⑤（上ノ表）のカマボコがなければイカを使う。

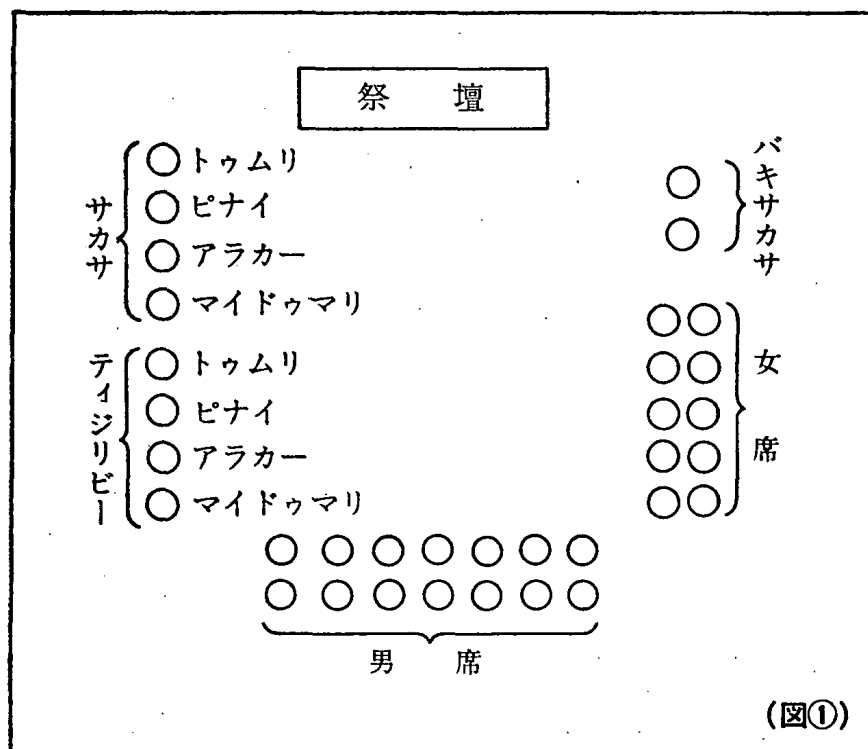
七時から八時の間にすべての準備が整う。その間にサカサ、ティジリビー、区長、公民館長、役員、有志、郷友会の人たちが続々とウガンに集まり、それぞれ所定の位置にすわる。ウブヤーの中の人たちの配置は、次のとおりである（図①、②）。バキサカサ

が線香に火をつけて香炉に立てる。祭壇の前にサカサがすわり、その後方にティジリビーがすわる。

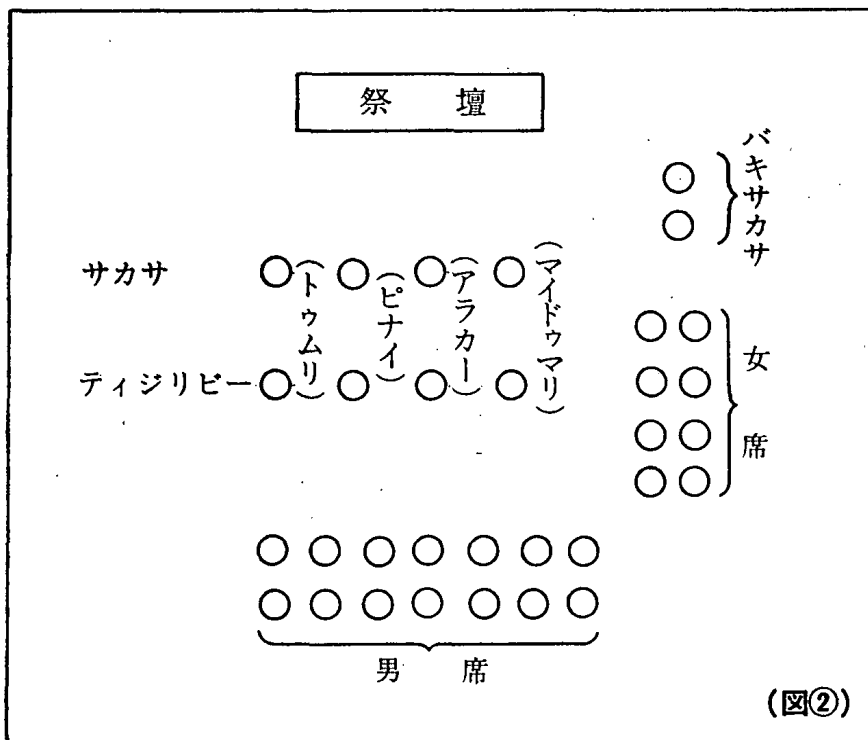
ユネンヌパイは八時ごろに始まる。サカサが白衣装、ティジリビーが黒衣装を着て所定の位置にすわると（図②）、いよいよ祈願が始まる。一同合掌する。神職以外の者は三分くらいでその姿勢を解く。神職の祈願は、大体二十分くらいである。

祈願がすむと、まず、神酒をサカサが飲み、次にティジリビーが飲む。そして男が飲み、女が飲み、最後はポーチャヤーの者が飲む。この神酒を△マチグシ▽（まつった神酒の意）という。神酒をいただく盃はウガンの数だけしかない。神酒をいただいたサカサは、それぞれのティジリビーに盃を回す。吸い物も授けられ、先の要領で皆で食す。△直会▽である。

(休憩の場合)



(祈願を行う場合)



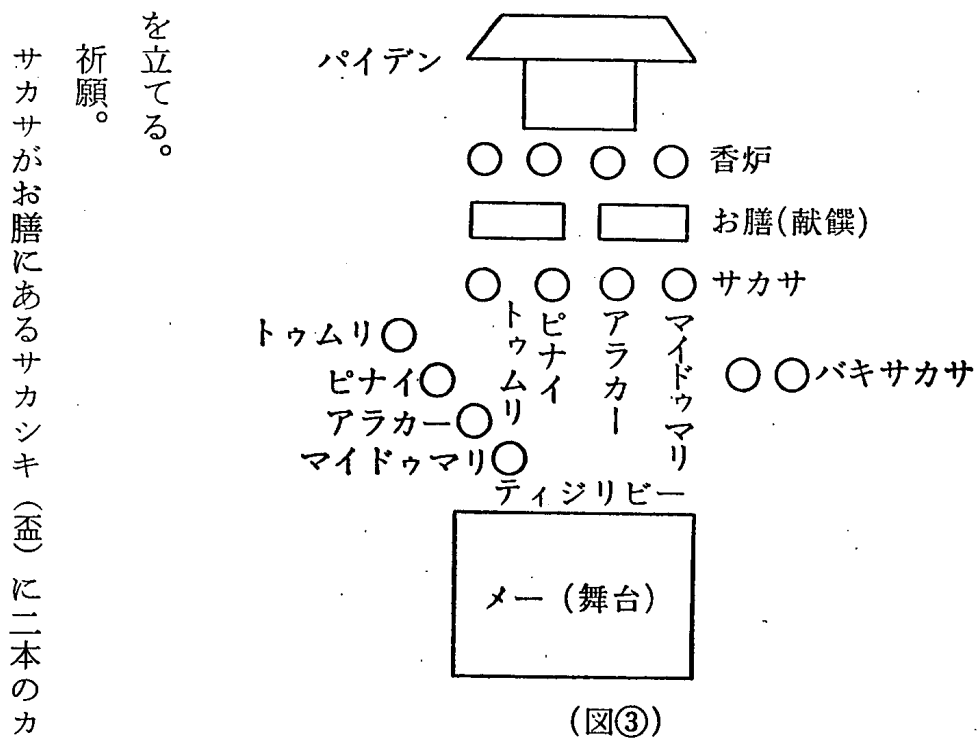
ユナカヌパイは、午前零時ごろに行われる。献饌や祈願の仕方は、ユネンヌパイと同じである。ユネンヌパイからユナカヌパイに至るまで、各家や有志から寄せられた香花、酒、菓子類を神前に供えて、この時はサカサだけで祈願をする。これらの品々も皆に分配する。また、三味線、笛、太鼓の伴奏で歌い、踊る。ここで歌われる民謡は、彌勒歌、鳩間中森、鳩間口説、千鳥節など、島でよく歌われているものである。その他にはテンポの早いにぎやかな歌舞が好まれる。

シトウムティヌパイは午前五時ごろに行われる。献饌や祈願の仕方はユネンヌパイと同じである。また、ユナカヌパイからシトウムティヌパイに至るまでは、歌舞でひとときを過ごす。もちろん酒、肴も出る。

シトウムティヌパイが終ると、後片付けをする役員を残して一同は家路につく。トウムリウガンから集落に入るまでは、サカサを先頭にして彌勒歌を歌いながら歩く。そして、ミルクンヤー（彌勒の面を保管している家）の西の路地まで来ると別れて各々帰宅する。

2 トーピン(当日)

午前十一時ごろから、トウムリウガンのパイデン（拝殿）にて祭儀を行う。豊年祭のトーピンの祭儀は各ウガンで行っていた。パイデンでは図③のようにサカサ、ティジリビー、バキサカサがすわって祭儀をとり行う。



サカサがお膳にあるサカシキ(盃)に二本のカンビン(神酒の入っているビン)から神酒をつぐ。

献饌は、①吸い物(七品の中身が入っている)

②スーニー(魚の肉を四角に切り、塩でもんだもの。

三切れずつ) ③フクサ(豆腐の味噌煮。三切れず

つ) 以上の三品である。各ウガンの分が用意

される。フクサは豊年祭の料理にはない。

バキサカサが線香に火をつけて香炉に立てる。

祈願。

一回目の吸い物を下げる。吸い物はポーチャ

ーヤーで新しく入れ替えて再び献じる。バキサ

カサ線香を立てる。

祈願。

二回目の吸い物を下げ、ポーチャーヤーで新

しく入れ替えて、再び献じる。バキサカサ線香

祈願。

サーフキ（茶請け）出る。サーフキは小皿にカマボコやトーフを盛ったもの。

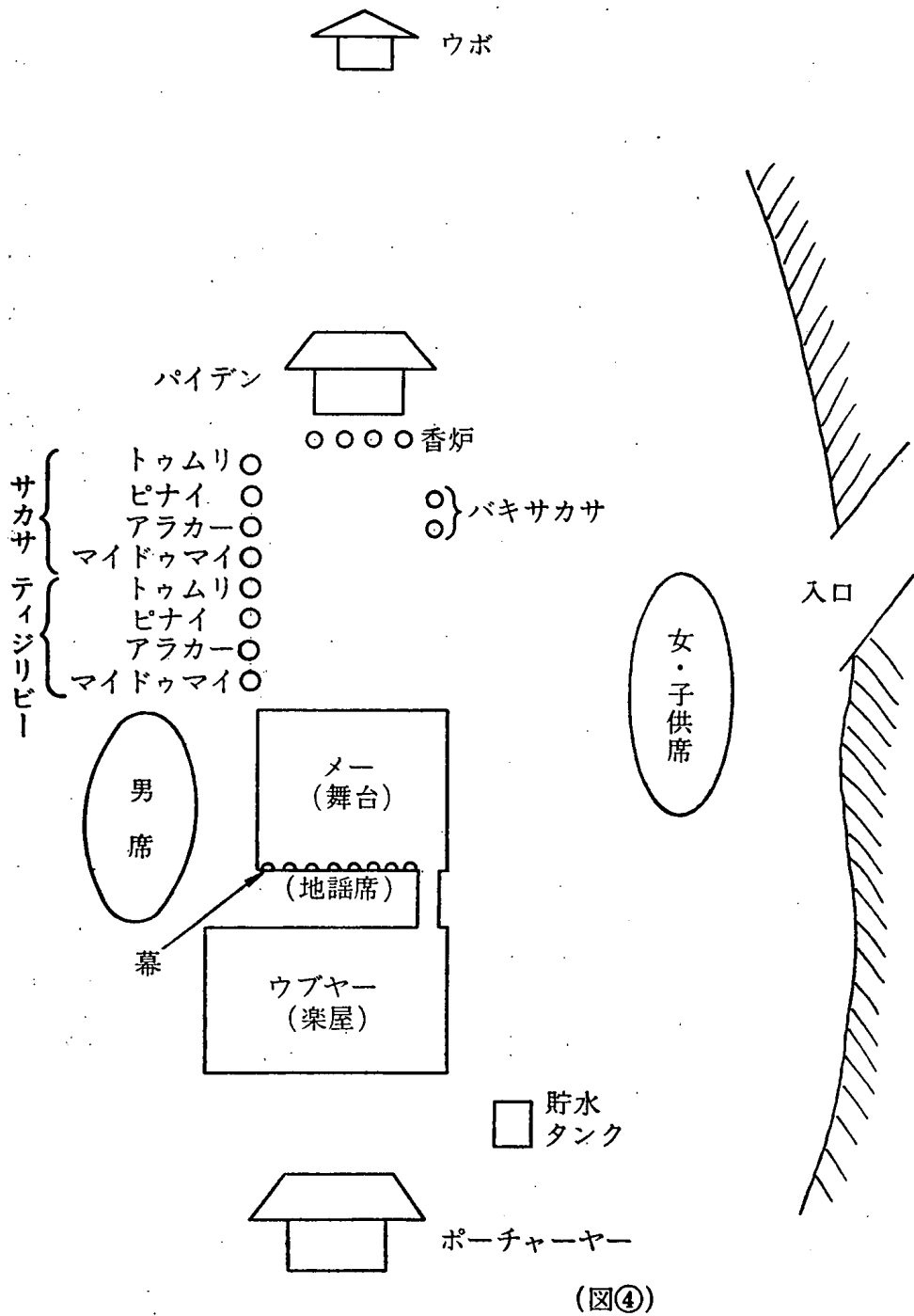
祈願。

サカサは、献饌のうちウツアナクの上のカンヌク、クバン、アライパナを少々とってアギゾー（十センチメートル正方形の紙）に包んで香炉の前に置く。

これで祈願は終る。バキサカサは香炉に線香を立てて置く。

このころに彌勒がトゥムリウガンに来る。彌勒の面を管理している家の者が面や衣裳を持ち、三味線、笛、太鼓等地謡の人たちといっしょにやって来る。また、舞踊をする人たちもぼつぼつやって来て、ウブヤーで舞台化粧をし、衣裳を着て出演の準備をする。観客もやって来る。この日は学校は休日となり、島の人たちは皆参加する。

一方、パイデンで祭儀をすませたサカサは、ウブヤーに安置されているハプトウケーマVの前に吸い物のお膳を置いて祈願をする。プトウケーは仏（像）のことで、マは愛称接尾語である。高さ二十五センチメートルくらいの石製の仏像である。トゥムリウガンにだけあって、その由来、伝承等々についてはよく知らない。プトウケーマの前での祈願は早目にすむ。サカサは再びパイデンの前に出て図④の位置にすわり、吸い物を召し上がる。バキサカサは吸い物の膳を下げ、新しい線香を立てる。祈願。



サカサだけ香炉の前で横に並んで行う。

神酒をサカシキに入れ、はじめにサカサが飲み、次にティジリビーが飲む。

そして、いよいよ芸能が演じられるのである。

二間四方のメーに幕を張り、舞台を設営する。幕は一面にだけ張り、三面から舞台が観れるようになってゐる。舞台はトーピンの朝、公民館の役員らによって設営される。

観客席は、舞台からパイデンに向かって左前方にサカサとティジリビーがすわり、左側は男席、右側が女・子ども席となる。ウブヤーが楽屋である(図④)。

豊年祭の芸能は、サンシキ(栈敷)と称する、つまり△庭▽で演じられ、歌舞音曲はテンポの早いものが好まれたが、結願祭の場合は舞台(仮設舞台)芸能で、歌舞音曲はテンポが遅く荘重なもの、古典音楽・舞踊といわれているものが好まれる。また、狂言が演じられるのも特徴的である。豊年祭と共通している演目に彌勒の舞がある。鳩間島の祭祀で彌勒の舞が登場するのは、豊年祭と結願祭だけである。

昭和五十年の結願祭は、旧暦九月十九日から二十一日(新暦十月二十三日から二十五日)までの三日間であった。そのときの芸能のプログラムは次のとおりである。

1、斉唱 かぎやで風節

- 2、舞踊 彌勒
- 3、狂言 座開き
- 4、舞踊 かぎやで風節
- 5、狂言 篋狂言
- 6、舞踊 鳩間中森
- 7、舞踊 鳩間口説
- 8、舞踊 花風
- 9、舞踊 鳩間早節
- 10、舞踊 赤馬節
- 11、舞踊 夜雨節
- 12、舞踊 こてい節
- 13、舞踊 むんじゆる
- 14、舞踊 かなかき
- 15、舞踊 古見の浦節
- 16、舞踊 揚作田節
- 17、舞踊 干瀬節

プログラムを見たり限りでは、狂言は二組しか上演されていない。この二組は毎年上演されている演目である。他にもいくつかの演目があり、過疎化現象で人口が減少する以前（昭和四十年代まで）は、舞踊二、三点おきに狂言を演じていた程である。

以下、毎年演じられている演目について、内容を紹介していきたい。「かぎやで風節」「彌勒」「座開き」「篋狂言」「鳩間中森」「鳩間口説」「鳩間早節」「かなかき」「干瀬節」。そして、たまたま出演者の都合で昭和五十年には演じられなかったが、「伊武田口説」「千鳥節」「農村早起き歌」についても紹介しておく。

① かぎやで風節

男装して一人で典雅に踊る。歌詞は沖縄各地でよく歌われている、

歌 詞

きゆぬふくらしゃや
なをにじやなたている
ちぶでいをるはなぬ
ちゆちやたぐとう

訳

今日のうれしさは
何にたとえようか
つぼんでいる花が
露に会ったようである

である。曲は御前風^{ぐぜんふう}五曲の一つで、御前風とは、琉球王朝はなやかなりしころ、宮廷での祝宴の際、

国王の御前で演唱するしきたりをもった曲のことである。△かぎやで風節▽は祝賀用として特に重んじられ、一般に祝宴、演奏会、舞踊などの催しのはじめに演じるならわしになっている。

翁一人が出る形、翁媼の二人が出る形、翁媼が子孫をひきつれて出る形など、いくつかの演出方法がある。道行十八（一八三八）年来琉した冊封使歓待の、いわゆる△戌の御冠船▽での△重陽之宴▽のプログラムの第一番目に「老人老女」とあり、これは、翁と媼の二人で踊っている。⁽⁴⁾衣裳等について「着付。老人、髪金入綴子丸頭巾、白作ひげかけ、綴子衣裳、金入錦大帯、足袋、杖つき、扇子差。老女、白毛髪うしろ垂し、長巾垂、編子桐衣、ひざ取かゝむ、紗綾形付衣裳、足袋、女こぼ団持出る」と記録されている。

この踊りを番組の冒頭に演じるのは昔からの風習であったようで、これは、本土の猿楽能の「翁」を番組の最初に演じたというしきたりと共通するものである。

② 彌勒

彌勒の面を被った者が左手に杖、右手に大きな団扇を持って先頭になって下手から登場し、後に十三名の婦人が続く。彌勒を中心にして婦人たちは円陣をつくり、左回りに回りながら舞う。婦人のうち二人は神酒の入ったカンビンを持ち、また二人は五穀の入った籠を持ち、残り九人は黄色の三角旗を持つ。彌勒の団扇の使い方は、常に、すくいあげるような所作でなければならない。この所作は、

幸せや豊饒や富貴など、つまり△世▽をすくいあげる意味だという。曲は「彌勒歌^{みろくうた}」と「やーらよー」の二曲。舞の構成・演出は豊年祭も同様である。三味線、笛、太鼓などの伴奏楽器に合わせて歌う。

(1) 彌勒歌

歌詞

一、たいぐくぬみりく

ばがばとうまいもり

くとうしからばとうま

ゆんがふでむぬ

サーンサーングーヤーサーサーサー

二、みりくゆやいもち

あしばばんあしび

ぶどうらばんぶどうり

うゆるしでむぬ

三、みりくゆぬしるし

とうかぐしぬゆあみ

訳

大国の彌勒様が

わが鳩間島においでになり

今年から鳩間島は

世果報であるよ

(囃子、以下省略)

彌勒世は招来され

遊ぶなら遊べ

踊るなら踊れ

お許しであるから

彌勒世の兆候は

十日越しの夜雨

かきぶさいみそり

しまぬあるじ

四、うすかじんくがに

みりくゆぬしるし

うくだかさむぬや

いすじわるび

五、けらぬだいたつし

うじがみぬじんく

うやぬだいたつし

はちぬうみんぐわ

六、ひやくはたちなていん

くとうしらんむぬや

とうしやゆたんていん

わらびさだみ

七、いまわらびやていん

くとうしゆるむぬや

お掛けください

島の主様

白ごとの穀物は

彌勒世の兆候

なまけ者は

急ぎ働け童たちよ

伽羅の名声を立てるのは

氏神の沈香である

親の名声を立てるのは

初の産み子である

百二十歳になっても

事(道理)を知らない者は

年はとっていても

童であるよ

今は童であっても

道理をわきまえている者は

すゆいぐわんたていてい
うとうなさだみ

八、すいめでいすしや

あとうぬたみでむぬ

はたらちゆるなかどう

かふやちちゆる

九、ばとうまかーぬみじや

いちまでいんかわらぬ

うりたゆていばとうま

ゆんがふでむぬ

(2)やーらよー

歌詞

ヤーラヨーヨー

ヤーラヨーヨー

一、きゆぬぴーば

首里へ願を立てて

大人であるよ

首里へ御奉公をするのは

後々のためである

働いているうちに

果報はつく

鳩間島の井戸の水は

いつまでも変わらない

これを頼って鳩間島は

世果報であるよ

訳

(囃子、以下省略)

今日の日を

むとうばし

ヤーラヨーヨ

ヤーラヨーヨ

二、くがにぴーば

にしきし

三、にがいおーら

ばがけーら

四、ていじりおーら

ゆすけーら

五、にがうにし

たぼーり

六、ていじるにし

あらしょーり

七、えんぬゆーや

なひんだら

八、んかいるゆーや

基にして

(囃子)

黄金の日を

基礎にして

祈願しましょう

私たち

手摺りましょう

皆さま

祈願したように

ください

手摺りしたように

あらせてください

来年の世は

もっともつとだ

迎える世は

ゆくんだら

— なお一層（豊年）だ

③座開きざーびら

座を開く、つまり、祝宴の座を開くという意味である。うふしゅー大主役に扮した者一人で演じる。下手から登場し、舞台中央前に立ち、一礼して祝言を唱える。

ざーびらき（座開き）

祝言

くりや

くぬむら

とうしぬ

しざがた

わんどうだやびる

かくうじがみぬ

うまむい

みしよーち

からだけんこー

訳

これなる者は

この村の

歳の

兄方（年輩）は

私である

各氏神が

御守護

くださって

体は健康で

ちくいむじくい
まんさく
うたびみしょーち
きゆぬ
ゆかるひ
くがにひ
なんじゃひに
しでいがふーぬ
うにげー
だやびる
やてい
むらぬ
わかむんちゃーぬ
しくでいある
うどういちょーぎん
うみかきやびらば

作り毛作（農作物）は
満作に
給われて
今日の
佳き日
黄金の日（吉日）
銀の日（吉日）に
孵⁺で果報の
お願い（祈願）で
ございます
さて
村の
若者たちが
仕組んである
踊り狂言を
ご覧にいられますので

むかてう

ちゅーるゆーや

ゆく

まさいまさいぬ

ゆーん

うたびみせーていぬ

うにげー

だやびる

やてい

ていーちえー

うどうい

うみかきやびら

「かぎやで風節」の後半の歌曲（「ちぶでいをるはなぬ ちゆちやたぐとう」で一さし舞って、下手へ退場する。

向かって

来る世は

さらに

勝り勝りの

世を

給わろうという

お願い（祈願）で

ございます

さて

ひとつ

踊りを

ご覧にいれましょう

祝言の内容、祭祀における機能、プログラムの初めの方で演じられることを等々からみて、沖縄各地の村踊りで演じられている八長者の^{ちよーじゃぬ うふしゅー}大主^{うふしゅー}である。八重山竹富島の「ほんじゃー」、与那国島の「う

ぶんだー」と同様、大主一人だけ登場して祝言を唱え、一さし舞って退場するという型である。⁽⁵⁾

④ 篋狂言 びらきょうげん

男一人で演じる。仕度は、芭蕉着を着け、裾をたくしあげる。藁綱でたすき掛けをする。裸足。右手に篋へらを持っている。下手から登場し、舞台中央前方に立って、一礼して祝言を唱える。

びら（篋狂言）

祝言

くりや

くぬむら

むじくいくーさ

はまさちどうやゆる

さてい

わったー

へーさんでうむれー

むらがしらぬちゃー

へーくでんな

訳

これなる者は

この村の

農作物作りを工夫した

浜崎という者である

さて

われわれが

早いと思ったら

村頭の皆さまが

早々とおいでになっている

さてい
わったーし
ちくてーる
かんだー
どうーどうー
みぐとうやっさー
かたばるぬ
がにぬ
あなかち
あぎてんねーし
どうーどうー
みぐとうやっさー
んだ
まじ
ていーちえー
ふっていんだ

さて
われわれが
作った
甘藷は
堂々と
見事であるよ
潟原(干がた)の
蟹が
穴を掘って
上げてあるように
堂々と
見事であるよ
どれ
まずは
ひとつ
掘ってみよう

さていさてい
さんせーなる
んまぐわーぬ
はちまらはんちゃん
ねーし
どうーどうー
みぐとうやっさー
むちぬぶてい
むらじゅーに
みしてい
みじらさんしみてい
ひるまさんしみてい
ちくらさにはしまん
んだ
まじ
ていーちえー

さてさて
三歳になる
馬の
勃起した陰茎に
似て
堂々と
見事であるよ
持ち登って
村中に
見せびらかして
珍しめて
不可思議せしめて
作らせよう
どれ
まず
ひとつ

んむぐさ

そーていんだ

以下、三味線等々の伴奏に合わせて、芋草を薙ぐ所作を演じながら唱える。

一、わかさとうちにや

くしん

やまんたしが

くぬとうしなてい

ヒーヤヨンナー

二、きゆや

ぬーが

かんうむっさる

しょーちゅーん

んじゃしば

ぬでいあしば

ヒーヤヨンナー

三味線等々の伴奏に合わせて、踊りながら下手に退場する。

芋草を

薙いでみよう

若かった時は

腰も

痛まなかったが

この年になって

(囃子)

今日は

どうして

こんなに面白いのか

焼酎も

出せば

飲んで遊ぼう

(囃子)

この狂言には、次のような伝承がある。

むかし、首里から△浜崎▽と名のる農夫が鳩間島にやって来て、農業を始めた。島での農業といえは畑仕事しかないが、浜崎の仕事は順調で、農作物は豊穰であった。これは神のお力添えがあったからだといって、浜崎はその喜びをトゥムリウガンの境内でうたいあげた。それが△びら狂言▽である。この狂言の祝言が首里方言で表現されているのも、浜崎が首里出身であったゆえンである。

ということである。これは、沖縄における芸能の地域的広がり、特に、狂言の伝播とも合わせて考察しなければならないことである。

狂言は八重山の他の島々でも盛んに演じられている。八重山では演劇すべてを称して狂言というところがあり、沖縄本島で使う狂言の意味、つまり、滑稽な劇、喜劇とは少々ニュアンスがちがっているようである。八重山で演じられている狂言には滑稽な笑いを目的とした演目もあるが、もう一つ、呪禱的な、儀礼的な内容の狂言がある。前者を△笑し狂言▽、後者を△例ぬ狂言▽ということがある。△笑し狂言▽には竹富島の「村勝負」「スルフクイ狂言」「タナドー屋」「塩売狂言」「蛸とり狂言」などがある。△例ぬ狂言▽には石垣市川平の「初番狂言」、竹富島の「ほんじゃー」「組頭」「種子蔭狂言」「世曳き」「あぶじ狂言」「天人」、小浜島の「総代」、与那国島の「うぶんだー」「ばんぐどうー」などがあり、鳩間島の「座開き」「びら狂言」もそれに属する演目である。

⑤ 狂言「農村早起歌」
のーそんはやお うた

狂言「畑勝負」はるしよーぶ「貞女」ていじょ「農村早起歌」のーそんはやお うたなどは、ごく最近までよく上演されていた演目である。

こうした演劇(狂言)は、沖縄本島から巡回公演で来島する劇団が上演していた演目を島の人たちが観て覚えたり、あるいは直接手ほどきを受けるなどして、祭祀の舞台上で上演することがあった。また、島の人たちが他の島へ行ったときに観劇し、それを覚えてきて、稽古をし、上演するということもあった。このような方法で、演劇を島の祭祀の舞台に定着させたのである。

狂言「農村早起歌」
のーそんはやお うた

配 役

父

母

嫁(カマドー)

孫

詞 章

一 訳

(鶏の鳴き声、牛の鳴き声)

(曲・でんさー節)

父

とういんうたゆたん
いすじうきんじてい
きゆぬしぐとうばに
かかれすらに

デンサー

ゆみつくわうくさい
あさうちやいりらし

母

んかしんちゆぬいくとうばに
あさにするゐなぐ
うりからどうさだみてい
をとうんゆだんしみゆん
んかしいましみ
ちちゆなぎな
あさにぬなゆみ

鶏も鳴いた

急ぎ起き出して

今日の仕事場(畑)に

取り掛かる

(囃子)

嫁子を起こして

朝のお茶を入れさせなさい

昔の人の言ったことばに

朝寝をする女は

それゆえに

夫も油断させてしまふ

昔の人の戒めを

聞きながら

朝寝ができようか

嫁

うきみそーち

ターリーたい

うきみそーち

アヤーたい

きさうきていをいびーしが

くわーにちーゆぬまち

デンサー

ぐぶりーなやびてい

いすじあさうちや

いっていうさぎら

母

んだんだ

ぼーじゃや

んめーとうあしばさ

父

起きられましたか（お早うございます）

お父様

お早うございます

お母様

先程から起きていましたが

子にお乳を飲みまし

（囃子）

御無礼しました

急いでお茶を

入れてさしあげます

どれどれ

赤ん坊は

おばあさんと遊ばそう

あさみしんすがてい
くわぬちゃーうくさい
みーくふあらち
いすじがっこーやらする
したくしみりは

デンサー

母

がっこーぬしんしーや
あさうきすしにどう
ふーびやくいみせーさ
あねあね
がっこーうくりてしまんさ

嫁

すがらちくいみそり

嫁

ちぬんはかまん

朝食も作って

子どもたちを起こし

目を覚まさせ

急いで学校へ行かせる

仕度をしなさい

(囃子)

学校の先生は

早起きする者に

褒美をくださるよ

ほらほら

遅刻してはなりませぬぞ

仕度させてください

着物も袴も

うりゆうり

あんしんちゅらさる

わがなしぐわ

わがわらびやとて

ちりていいちぶさ

デンサー

がっこーにいかば

しんしーぬいみせーし

みにいりやい

ちむにすみてい

ひとつにまきてーならんどーや

父

まなびやーにかゆてい

わらびんちゃーが

しみならてい

うとうながうみしゆし

それぞれ

なんてかわいい

わが子よ

私が童

連れて行きたい

(囃子)

学校へ行ったら

先生のおっしゃることを

耳に入れ(ちゃんと聞き)

肝に染めて(肝に命じて)

他人に負けてはいけないよ

学舎に通って

子どもたちが

学問を習って

大人ぶった顔を見せるのが

ぬーやかたぬしみ

デンサー

ありがちゆなてい

ちねーんをさみてい

むらんたしきてい

くにんむたばどう

とうしやゆらりる

(曲・白保節)

父

でいちゃーよー

うしちりてい

たちんじてい

ちばていくー

ひーらとうくえーとうや

わーがむちゆくとう

やーやくえーかたみり

何よりの楽しみだ

(囃子)

彼が一人前になって

家庭を治めて

村を助けて

国(沖繩)を治めてこそ

年をとりたい

皆さん

打ち連れて

立ち出て

頑張ってこい

鎧へらと鍬くわは

私が持つから

君は肥料を担ぎなさい

母

ゆみぬかまどーや
ちりんあくたん
ほーちかたみりよー
あさぐとうゆーぐとう
はるにくえーどうん
うくりてならんどー
しぐとうばーにんじてい
わんとうぼーじゃとう
ぬくてい
わったーたいや
ぬーんさんぐとう
んなぐえーぬなゆみ
んだんだ
ぼーじゃや
くまににとり

嫁のカマドーは
塵芥を
掃き集めて持ちなさい
朝な夕な
畑に肥料を（加えることを）
遅れてはならぬぞ
（皆）仕事場（畑）に出て
私と赤ん坊は
残り（留守番）
私たち二人は
何もせずに
ただ食いができようか
どれどれ
赤ん坊は
ここに寝ていなさい

わったーんはたらちんだ

(赤ん坊の泣き声)

母

うねまたぬーやが

しーどうするい

んなーどうするい

あきとーちゃーすが

まいほーたるむん

あらていとうらさ

(曲・真謝井戸節^{まじやんがし})

嫁

なまどう

はるからちやーびーしが

かなしーぐわーや

ちやーさがたい

母

私たちも働こう

おや、また何んだ

おシッコをするのか

ウンコをするのか

あらまあ、どうしよう

たれ散らしてあるよ

洗ってあげよう

今

畑から戻って来たが

愛しい子は

どうしました

うね、なま

んなーまてい

あらゆんでいる

わんねーすんでー

いすじみじくみくー

(赤ん坊の泣き声)

母

なかん

かなしーぐわー

(曲・白保節)

父

はるからやちょーしが

がっこーからや

なーだくーに

孫

なまどうちやーびる

ほら、今

ウンコをして

洗おうと

私はしているよ

急いで水を汲んで来なさい

泣くな

愛しい子よ

畑から(戻って)来たが

学校からは

まだ来ないのか

今、戻りました

こーぬいちばんとうやい

ちゃーびたん

父

んちゃんちゃやてーさ

ふんとーやてーさ

まくとうやてーさ

とうないぬあやーん

たんかぬんめーん

うんちけーしくー

うちゃんいりりば

だっちょーんんじゃしば

うゆえーさびら

(口説)

父

あさうきむじゃくいや

科挙(士族男子の受ける文官試験)の一番を取得

して

来ましたよ

そうかそうだったのか

本当であったよ

真実であったよ

隣のおばさんも

向かいのおばあさんも

ご招待しなさい

お茶も入れて

らっきょうも出して

お祝いしましょう

早朝の農作業は

ひとつまさい

なしぐわがくむん

すぐりゆる

うやぬくくるぬ

うりしさや

△囃子▽

イヤイヤ

くまぬとうちに

ゆすりてをがみば

めーやじんくら

くしやんにむい

なしぐわはんじょー

あわぬさかちち

うじゃからみぐらち

サーヒンビンヒンビン

くわっちーさびたん

他人より勝り

子どもは学問が

優れている

親の気持の

嬉しいことよ

（囃子）

ここの殿内に

参上して拝見すれば

（屋敷の）前に銭蔵

後ろに稲叢

子孫繁昌

栗（酒）の盃を

御座（一番座）から回し

（囃子）

ごちそうになりました

⑥ 鳩間中森

一般に、「鳩間節」といわれているものには、荘重なメロディーをもつものと、テンポの早いものがある。鳩間島では、前者を「本節」といって、「ばとうまなかむり（鳩間中森）」と称し、後者を「早節」といい、「ばとうまはやぶし（鳩間早節）」と称している。単に「鳩間節」といった場合、鳩間島では「鳩間早節」のことをさしている。

「鳩間中森」は、ガン（白カカン）と赤襟の黒のステイナの上にタナシ（黒の打掛け）という古装で、左肩袖抜きに着け、頭には頂花、横差しの花をさし、垂し花を頭からイロラー（髷）とともに背中に垂らし、四つ竹を持って二人で踊る。鳩間島の儀式、祝宴では必ず歌われ、踊られる。舞踊の場合、歌詞は四番まで歌われる。

ばとうまなかむり（鳩間中森）

歌詞

一、ばとうまなかむり
 ばりぬぶり
 くばぬしたに
 ばりぬぶり

訳

鳩間中森に
 走って登り
 蒲葵の下に
 走って登り

ハイヤーヨ

ディーバ

カイダキ

ティートウルトウ

テンヨー

マサティミグトウ

二、かいさむいたる

むにんぬくば

たかさむいたる

ちぢぬくば

三、まいぬとーゆ

みわたしば

いくふにくるふに

うむしるよ

四、まいやしみしき

うむしるよ

(囃子、以下省略)

美しく生えた

森の蒲葵

高く生えた

頂上の蒲葵

前の渡(海)を

見渡すと

往く舟来る舟の様が

面白いことよ

稲は積み重ねて

すばらしいことよ

あわやしみたてい
さていみぐとう
五、まんかばいばた
みわたしば
ばまぬみるすや
くらぬばま
六、かいさまりたる
くらぬばま
しるさまりたる
しるばまよ
七、くらぬばまから
かゆぴとうや
うらぬまいぬ
ぴとうくる
八、いんだふくばま
しざばなり

粟は積みかけて
さても見事だ
真向かいの南端ぱいばた(西表島)を
見渡すと
見える浜は
小浦の浜
美しく生まれた
小浦の浜
白く生まれた
白浜よ
小浦の浜から
通う人は
蔵元の大路を歩く
風情である
伊武田、福浜、
下離(の各地)は

ふのーらからぬ
ましぬじよ

九、ふのーらぶすぬ

みるみーよ

ういばるぶすぬ

しくみんよ

二〇、うんしくり

みぎらしよ

あわしくり

なうらしよ

二一、うんみさくん

しくりょーり

あわざぎん

まらしょーり

二二、うんみさくぬ

ふかいばな

船浦よりも

立派な土地である

船浦の人の

見る目よ

上原の人の

聞く耳よ

甘藷を作って

稔らして

粟を作って

実らして

甘藷のお酒も

造ってください

粟のお酒も

造ってください

甘藷のお酒の

ほて始め

あわぎぬ

あむりばな

三、ういばるぶすぬ

ばりくばよ

ばまぐるに

さきぬまし

一四、ふのーらぶすぬ

ばりくばよ

あでいんがぐるに

さきぬまし

一五、ゆぬなんか

あさびょーら

びぬなんか

まいおーら

栗酒の

泡盛り始め

上原の人が

走って来たら

蛤の殻に

酒を注いで飲ませよ

船浦の人が

走って来たら

櫂かの実の殻に

酒を注いで飲ませよ

夜の七日

遊びましょう

日の七日

舞いましょう

⑦ 鳩間早節

歌詞は「鳩間中森」と同じである。舞踊の場合、歌詞は四番まで歌われる。

頭は三角鉢巻、服装は筒袖に打掛け、足袋、脚絆という軽装で、櫓を持って一人で踊る。軽快な動きをもつダイナミックな踊りと合わせて歌われ、広く人口に膾炙している。

早節は、明治・大正・昭和にかけての名優伊良波尹吉がアレンジしたといわれている。伊良波は八重山巡業中にこの曲を見出し、当時、古典舞踊・劇界の大家であった渡嘉敷守良に対抗するために、△かっぱれ▽など日本舞踊の手を巧みにおり込んで振り付け、大正の初め劇中で踊って俄然人気曲になったという。

⑧ 千鳥節

「前ぬ浜」ともいう。二人で踊る。カカンに白筒袖、縞脚絆、白足袋、頭に鳥のかむり。両手に扇を持つ。

千鳥節（前ぬ浜）

歌詞

一、まいぬばま ヨー
ちどろりやどろり

訳

前の浜の ヨー（囃子）
千鳥 宿り

とうぶとうり ハーリ

みりくゆーぬ ヨー

ちどろり

二、ばまざきはま ヨー

ちどろりやどろり

とうぶとうり ハーリ

すーゆくいぬ ヨー

ちどろり

三、ならりばま ヨー

ちどろりやどろり

とうぶとうり ハーリ

なんくいぬ ヨー

ちどろり

四、ふなばるばま ヨー

ちどろりやどろり

とうぶとうり ハーリ

飛ぶ千鳥は ハーリ (囃子)

彌勒世果報の ヨー

千鳥である

浜崎浜の ヨー

千鳥 宿り

飛ぶ千鳥は ハーリ

潮を越えて飛ぶ ヨー

千鳥よ

ナラリ浜の ヨー

千鳥 宿り

飛ぶ千鳥は ハーリ

波を越えて飛び交う ヨー

千鳥よ

船原浜の ヨー

千鳥 宿り

飛ぶ千鳥は ハーリ

すーゆくいぬ ヨー
ちどろり

五、ふかばかばま ヨー

ちどろりやどろり
とうぶとうり ハーリ

なんくいぬ ヨー

ちどろり

六、しまなかばま ヨー

ちどろりやどろり
とうぶとうり ハーリ

すーゆくいぬ ヨー

ちどろり

七、たちばるばま ヨー

ちどろりやどろり
とうぶとうり ハーリ

なんくいぬ ヨー

潮を越えて飛ぶ ヨー

千鳥よ

フカバカ浜 ヨー

千鳥 宿り

飛ぶ千鳥は ハーリ

波を越えて飛び交う ヨー

千鳥よ

島仲浜の ヨー

千鳥 宿り

飛ぶ千鳥は ハーリ

潮を越えて飛ぶ ヨー

千鳥よ

立原浜の ヨー

千鳥 宿り

飛ぶ千鳥は ハーリ

波を越えて飛び交う ヨー

ちどり

八、やらぬばま ヨー

ちどりやどり

とうぶとうり ハーリ

すーゆくいぬ ヨー

ちどり

九、いんとうまばま ヨー

ちどりやどり

とうぶとうり ハーリ

ゆんがふぬ ヨー

ちどり

鳩間島の九つの浜に群れ飛ぶ千鳥を歌った民謡である。浜は島の人びとの生活や宗教と密接に結びついている。

歌詞の最終部に「ハハーリ ゆんがふ」とあるように、この群れ飛ぶ千鳥に「世果報」の前兆を認めているのである。換言すれば、この千鳥に象徴された平穏で豊かな島であるようにという祈りをこめた予祝の歌である。

千鳥よ

屋良の浜の ヨー

千鳥 宿り

飛ぶ千鳥は ハーリ

潮を越えて飛ぶ ヨー

千鳥よ

イントウマ浜の ヨー

千鳥 宿り

飛ぶ千鳥は ハーリ

世果報の ヨー

千鳥であるよ

⑨ 鳩間口説 ばとうまぐどうきん

「元口説」むとうくどうきんと「鳩間口説」がある。両者とも同じ口説の曲で歌われるが、後者にはハ囉子Vがあるが、前者にはない。

舞踊は「元口説」で踊る。二人で踊る。仕度は、黒紋付、広帯前結、白腰帶、頭に頂花、挿し花、白前結鉢巻、縞脚絆。両手に扇を持つ。

(1) 元口説 むとうくどうきん

歌詞

一、さていむゆたかぬ

ばとうまむら

ふーきばんぶく

うちちぢく

ゆゆむかわらぬ

ばとうまむら

二、しかるたみに

みなするてい

訳

さても豊かな

鳩間村

富貴万福

うち続く

代々も変わらぬ

鳩間村

然る為に

皆揃って

しちんたがわん

むじくいぬ

まんさくちくてる

いにあわや

三、またやはるしち

なちなりば

なうりみぬりぬ

いにあわや

へイヤーへイヤーとう

かりうさみ

(2) 鳩間口説
ばとうまぐどきん

歌 詞

一、ぎにやゆたかぬ

ばとうまむら

しまぬながりゆ

時節も違わず

毛作(農作物)の

満作に作った

稲粟は

又も春の時節

夏になれば

直り稔りの

稲粟は

へイヤーへイヤーと

刈り収めよ

訳

実に豊かな

鳩間村

島の流れ(形)を

みわたしば

るくぬいちじに

ちかくあり

△囃子▽

イヤイヤ

うすーめーで

かるまきうらりてい

うやくちよーで

とうじっくわ

やしなてい

むらとうんわぶくに

わらびとうしゆり

くわんくわー

うどうくぬ

むじきなむぬさみ

んぞさそーりば

見渡すと

六の一文字に

近い

イヤイヤ

御主前で

寄り集まっいて

親子兄弟

妻子を

養って

村人とも和睦に

童、年寄り

クワンクワ

男の

無邪気な者よ

可愛いがれば

ていんぬみぐみぬ

うやきはんじょー

あらしみせゆさ

なまぬはやしに

くどうきゆみゆみ

二、ばとううまなかむり

ぱりぬぶり

ゆむぬきしきゆ

ながむりば

いぬちながる

くばぬした

△囃子▽

イヤイヤ

びとうぬみぬちや

さんあていならんさ

ぬちぬありわどう

天の恵みが

裕福繁昌

あらしめなさるよ

今の囃子に

口説を詠め詠め

鳩間中森に

走って登り

四方の景色を

眺めると

長寿延命の

蒲葵の下

イヤイヤ

人の命は

予知することができない

命があればこそ

ちむぬうむていん

くくるぬあるていん

じゅーじゅーさまさま

かねていいかりさ

なまぬはやしに

くどうきゆみゆみ

三、あれにみゆるは

うむとうだき

やらぶたきどうん

くばまだき

くんぬやいだき

ばとうばなり

△囃子▽

イヤイヤ

しまぬありさま

うふちばなりぬ

肝の思いも

心の思いも

色々様々

叶っていくことだ

今の囃子に

口説を詠め詠め

彼方に見えるのは

於茂登岳

屋良部崎 竹富島

小浜岳（大岳）

古見の八重岳

鳩離島

イヤイヤ

島の有様は

大西表島の

あぬたかぬたぬ
たかさひくさや
とうなみならんさ
しじくわしまに
すだていんちゃりば
しんとう

たぬましむぬさみ
なまぬはやしに
くどうきゆみゆみ

四、まえにみゆるは

びないさーら
うみにながゆる
たつかわや
ゆゆむからわらぬ
うむしるよ

△囃子▽

彼方此方の
高さ低さは
均すことが出来ない
非常にわが島に
育ってみれば
本当に

頼もしいものよ

今の囃子に

口説を詠め詠め

前方に見えるのは

ピナイ滝

海に流れる

立つ川は

代々も変わることなく

面白いことよ

イヤイヤ

うみとうやまとうや

うなじくむぬさみ

たとうていんちやりば

とうじとうぶとうとうや

ひとうちどうやんていさ

りくぬはなしぬ

かわりんかわりば

うやきはんじょー

あらしみせゆさ

なまぬはやしに

くどうきゆみゆみ

五、まくとうしきしみ

ばとうまむら

ういむわかきむ

ぴとうくる

イヤイヤ

海と山とは

同じものであるよ

例えてみれば

妻と夫とは

一つであるという

祿の話が

変わり変わっても

裕福繁昌

あらしめなさるよ

今の囃子に

口説を詠め詠め

誠聞こえし

鳩間村

老いも若きも

一心

しじくはんじょーぬ
なうまさる

△囃子▽

イヤイヤ
かみぬくるに
たむきあるらば
みぐりみぐりぬ
なしぐわうむんぐわ
んまりんまりてい
あとうゆんさきゆん
てーらんむぬさみ
あたるうやふじ
らくゆみせゆさ
なまぬはやしに
くどうきゆみゆみ
六、いにやしきぬ

非常に繁昌が
尚勝る

イヤイヤ
神の心に
恵みがあれば
廻り廻りの
産し子生み子が
生まれ生まれて
後にも先にも
絶えないものであるよ
当たる祖父母は
楽をなさるよ
今の囃子に
口説を詠め詠め
稲の植付けは一升桝幅ますに

ゆかでいさみ

しぐわちぐぐわちぬ

なりぬれや

へイヤーへイヤートウ

かりうさみ

△囃子▽

イヤイヤ

ゆたかなるゆぬ

しるしさみえー

あみやとうかぐし

かじやしじかに

しくりむじくい

まんさくそーりば

いひんかたとうき

ゆだんやならんさ

きんとうきばりよ

植えるのがよい

四月五月の

慣習いは

へイヤーへイヤート

刈り収め

イヤイヤ

豊かなる世の

兆候は

雨は十日越し

風は静かに

作り農作物が

満作になれば

ほんの片時も

油断はできない

しっかり頑張れよ

にせたー

うむしるむぬさみ

なまぬはやしに

くどうきゆみゆみ

七、ばとうまはいばた

かゆふにぬ

かぎりかぎらん

くるりくる

いにやましんじ

くぎわたし

△囃子▽

イヤイヤ

きばりきばりよ

でいきゆるふどうさみ

いにやまんさく

やーぬかじかじ

二才（青年）達よ

面白いものであるよ

今の囃子に

口説を詠め詠め

鳩間島と西表島を

通う船が

絶え間なく

往き来する

稲を満載して

漕ぎ渡し

イヤイヤ

頑張れ頑張れよ

出来る程に

稲は満作

家毎に

ゆかぬありさま

しんとうみちくみ

ゆかやポンポン

いりりばチョンチョン

ぶりゆるふどうさみ

なまぬはやしに

くどうきゆみゆみ

八、きみぬみぶきん

たれあまり

かみんふとうきん

うはちあぎ

すぬぬあまりや

ただけり

△囃子▽

イヤイヤ

にんぐじょーの

床の有様は

いっばい米が満ち込み

床はポンポン

入れればチョンチョン

折れる程であるよ

今の囃子に

口説を詠め詠め

君主の御恩義も

垂れ余り

神にも仏にも

お初をあげ

その余りは

いただきます

イヤイヤ

年貢上納は

ゆりゆとううさみてい

かみんふとうきん

うはちんあぎゆり

あまりぬくりや

うさきうみきん

しくりまらしょーり

みちぬしまたに

ていさじめーうき

うどういきょーぎん

うむしるむぬさみ

なまぬはやしに

くどうきゆみゆみ

九、ゆるやひるやとう

さかむれに

うたやさみしん

とうんじたてい

余裕をもって納めて

神にも仏にも

お初をあげて

余り残りは

酒、神酒を

醸造してください

道の巷に

手拭、鉢巻を締めて

踊り狂言をするのは

面白いものであるよ

今の囃子に

口説を詠め詠め

昼や夜やといって

酒盛りに

歌や三味線が

飛び出し

しまぬぬじゃぬじゃ
たていあしば

△囃子▽

イヤイヤ
むかしみるくぬ
しるしさみえー
うてーもーてー
すでいをすらにてい
うむしるむぬさみ
なまぬひきばや
うたゆかわしば

⑩伊武田口説いんだくどうきん

伊武田は西表島北岸にある地名で、かつて鳩間島の人たちが往来して田を耕作し、稲をつくっていたところである。

二人踊り。一人はかむり、広帯、腰帯、白足袋、二本扇の二才仕度。他の一人は鉢巻、芭蕉布の紵、

島の隅々に
立ち遊ぼう

イヤイヤ
昔彌勒世の
兆候であるよ
歌って舞って
袖を連ねて
面白いものであるよ
今の引羽は
歌を交せば

腰帶、白足袋、二本扇の女仕度。

伊武田口説

歌 詞

一、わんどぅばとうまに
なうたちゆる

いんだしくどうん

くぬしまぬ

とうしぬしじゃがた

わんどぅやゆる

二、とうじぬはーめーん

とうしとうやい

やみにうすりてい

じゆならん

さらばんじたてい

はなとうめが

三、えーたり

訳

私が鳩間に

名高い

伊武田筑登之

この島の

年輩は

私である

妻の姥も

年をとり

病に伏して

自由にならぬ

それでは出で立ち

花（女）を探しに

ねー、あなた

ゆながたなていうしが
まーんかいんじめーが
とうしゆりぬ

きちやいどうげらば
でーじあらに

四、いなぐわらびや

むぬしらん

とにもかくにも

わがくる

んじていくさき

かまわるな

五、とうしんはじらん

くぬびとうや

ゆすぬむぬわれ

なていいかば

たいがうらりみ

夜になっっているが

何処へ出かけるのか

年寄りが

嘖いて怪我をしたら

大変じゃないか

女、子どもは

ものを知らない

とにもかくにも

わが心

出て行く先は

構うな

年も恥じない

この人は

余所^{よそ}のもの笑いに

なれば

二人が居れようか

くぬしけに

六、んじるかんちやや

はなさちゆい

あまりうすりぬ

じゆならん

さいたおとこの

あやまりや

この世間に

出る葛はかづら

花が咲くのか

あまりのおそれで

自由にならぬ

変な男の

過ちは

⑪ かなかき

琉球古典舞踊りの△女踊▽の中でもっとも好まれ、親しまれている「かせかけ」のことである。

仕度は、赤襟の黒のスティナ、白カカン、黒の打掛け、左肩袖抜き、粋と糸巻を持つ。所作で糸巻を逆手にとって踊る技法がある。二人で踊る。

△出羽▽むとうだな本田名節

歌 詞

わがていびちしちやる

ななゆみとうはてん

訳

私が自らの手で引いた糸で

七読の上等の布を織って

さとうがあけずばに
んすゆしらに

△中踊▽真福地のはいちやう節

わくぬいとうかしに

くりかいしがいいし

かきていうむかじぬ

まさていたちゆさ

△入羽▽揚高禰久節

かしんかきみちてい

でいかよたちむどうら

さとうやわがやどうに

まちゆらでむぬ

本田名節・真福地のはいちゃう節・揚高禰久節の三曲構成で、琉球舞踊が踊られることはほとんどない。まして「かせかけ」が踊られることは、管見によれば、鳩間島以外にはない。

ところが、琉球古典音楽の三味線楽譜「工工四」には本田名節の項に、次のように記されている。⁽⁶⁾

本節ハ本田名節・真福地ノハイチャウ節・揚高禰久節ノ三曲ヲ一組トス

恋人のために蜻蛉の羽のようなきれいな
御衣を作ってあげたい

わくの糸かせを

くり返し返し巻きつけていると

恋人の面影がくり返し返し眼前にちらついて

思慕の情がますばかりである

かせもすっかり掛け終ったから

さあ、帰ろう

あのお方はわが家に

待っていらっしゃるであろう

この三曲を演唱する場合には組曲として歌われていることがわかる。

「かせかけ」に、真福地のはいちゃう節を用いた例は「躍番組」に記録されている。⁽⁷⁾

女おとり かすかけ

芋の葉ふし、真福地のはいてふ節並七尺ふしニ而、立雲節

琉球古典舞踊の△女踊り▽は、元来、三曲三部構成(出羽・中踊り・入羽)で踊られていた。たとえば、「かせかけ」は、現在、干瀬節と七尺節の二曲で踊られる場合が多いが、各地の村踊りなどをみると、前述の二曲のあとに入羽を「百名節」か「さあさあ節」で踊っており、つまり、三曲構成である。また、古文献資料「躍番組」に記録されているように、以前には「かせかけ」は三曲で踊っていたことがわかる。⁽⁸⁾

⑫ 干瀬節

「シチョブシ」と呼称している。干瀬節のことを「シチョブシ」と称することは、古典音楽の三味線楽譜「工工四」にも記されている。⁽⁹⁾

びん型衣裳の仕度に、花笠を持って踊る。二人踊り。

△出羽▽干瀬節⁽¹⁰⁾

歌詞

一 訳

しぬぶあとうかくす
はるぬはながさや

すらすじるあみぬ
わすでいぬらち

△入羽▽さあさあ節

はなんながみたい
でいかよたちむどうら
さとうやわがやどうに
まちゆらでむぬ

この踊りは、結願祭で必ず最後に踊られる演目である。

以上、芸能の演目のいくつかを紹介してきた。「たらくじ」や「古見の浦節」も、鳩間島では八古典舞踊▽として親しまれている演目であり、結願祭では欠くことのできないプログラムである。その他の舞踊、狂言を含めて、後日、結願祭の全プログラムを紹介し、全体像を詳細に明らかにする機会がある。

恋人のもとへ忍んで行くときに

ひそかに顔をかくすために笠を被っているの
に

空すぎる雨（涙）で

わが袖をぬらしてしまった

花も眺めた

さあ、帰ろう

あのお方はわが家に

待っていらっしゃるであろう

「干瀬節」は最後のプログラムであり、この踊りが踊られている間、サカサはパイデンの前にすわって祈願する。この踊りが終ると一同の者パイデンに向かって合掌する。合掌を解き、サカサはお神酒を注いで、サカサ、ティジリビー、島の人たちへと、同じ盃を使って、まわして飲む。

彌勒の面を彌勒家みろくやにお返しする。サカサが先頭になり、彌勒の面・衣裳を持った者、ティジリビー、地謡の人たちという順で、彌勒歌を歌いながら歩く。彌勒家の前の道にさしかかると彌勒の面・衣裳を持った者が先頭になり、サカサがその後に続く。公民館の役員が彌勒家の戸を開ける。所定の場所に彌勒の面を安置する。サカサ、ティジリビーが合掌をし、祈願をする。神酒をサカサ、ティジリビー、一同の者の順にまわして飲む。彌勒歌を歌う。そして解散となる。

役員は再びトゥムリウガンに戻り、後片付けをする。子どもたちは、トゥムリウガン内にあるクロツグを切りとり、工作をしたり、遊び道具を作ったりする。クロツグは、結願祭と豊年祭以外の日にウガンから切ってはいけなさとされている。

3 トウジミ（終結）

三日目は、公民館において△トウジミ▽が行われる。トウジミは、事の成就し終ること、千秋楽という意味であり、つまり、祭祀の終結のことである。この日はサカサやティジリビーはウガンには行かない。大人は午後から、酒肴を携帯して公民館に集う。夜おそくまで、舞台に飛び入り形式で出て

余興を披露し、ひとときを楽しむのである。くつろいだ雰囲気で、なかなかいいものである。各自、一芸を披露する前に、この一年間の反省を一言申しのべる習わしがある。

結願祭が終ると、対岸の両表島へ行き、△マトナー▽といって二度目の田圃の整地をする。

Ⅲ 祭祀と文芸についての覚書

第Ⅱ章において、鳩間島の祭祀のひとつ、結願祭における文芸の一端をみてきた。今回はサカサの唱える△フチ▽（口。神聖なことば。祝詞）を割愛したが、他の祭祀の場合も含めて、△フチ▽はそれだけを別途とりあげて吟味するだけの内容をもっている。△フチ▽についての考察は他日を期すことにし、ここではその一例を紹介するにとどめたい。

それは、毎年旧暦八、九、十月のいずれかの△戊戌▽か△己亥▽の日で、結願祭の後に行われる△シチ▽のときに唱えられる△フチ▽である。シチは年の折目、季節の折目を意味する△節▽のことであり、節替り、年迎えのことである。だから、鳩間島ではシチのことを「シチソングチ（節正月）」「グマソングチ（小正月）」といっている。個人（家）レベルの祭祀である。△シチフルマイ▽といって赤飯を炊き、盛り沢山の料理をつくって祝う。

家の内外を清掃し、島の裏（北側）海岸近くの岩に這っている△節葛▽（ハギカズラ）を取って来て、家の柱、諸道具、水甕などに結わえる。人の耳にも輪をつくって巻きつける。ススキの葉を△サン結

び▽（輪をつくって結びこめる）にし、桑の枝といっしょに結わえて家の四隅、壁、門に差しておく。
魔除けである。また、浜の真砂をまいて厄払いをする。

夜、△シチピー▽（節妖怪）といって、さまざまな予兆が現われるといい、そろって△パカヤマ▽（墓山。墓地）近くに行く。シチピーをみた者は、しゃがんで桶を頭からすっぽり被り、耳をすましていると他界の話し声が聞こえるという。

さて、夕方、真砂をまく前に、△フチ▽を唱える。北（キナガ子の方）からまき始める。屋敷内を左回りに回りながらまく。まいている間は戸を閉めておく。真砂を戸にも、つまり、家の方にもまくからである。その家の主人か主婦、あるいは年長者のいずれかの者が、△フチ▽を唱えて真砂をまくことになっている。

しちぬふち（節のフチ）

フチ

くぬやしきうち

しるうちに

しち

んかいしおーりてい

訳

この屋敷内

城（屋敷）内に

節を

お迎えして来て

やしきうち
しるうち
やーざらい
みーざらいし
っさるばー
にーぬばーぬ
かみんがなし
じゅーにほーぬ^①
かみんがなしぬまい
まむりしき
たぼろーり
ななすーぬばな
すーぬばな
とうぎ
やーざらい
みーざらい

屋敷内
城内
家の厄払い
屋敷内の厄払いをして
申しあげるので
子の方(北)の
神加那志(神様)
十二方の
神加那志の前(神様)
ご守護して
ください
七潮の端(真砂)
潮の端(真砂)を
取って来て
家の厄払い
屋敷内の厄払いを

っさーばー
びーん
さびーん
あらしめ
たぼろーんぐとうに
まむり
たぼろーり
ふんだみ
きないたいそー
ばずみ
やーにんず
きないふあーま
まむり
たぼろーりてい
きないぬ
さかい

するので
塵も
芥も
あらしめ
給わらないように
ご守護して
ください
家長
家内大將（家長）を
はじめ
家族
家内子どもたちを
ご守護して
くださって
家内の
繁栄を

あらしみ

たぼろーり

あらしめ

ください

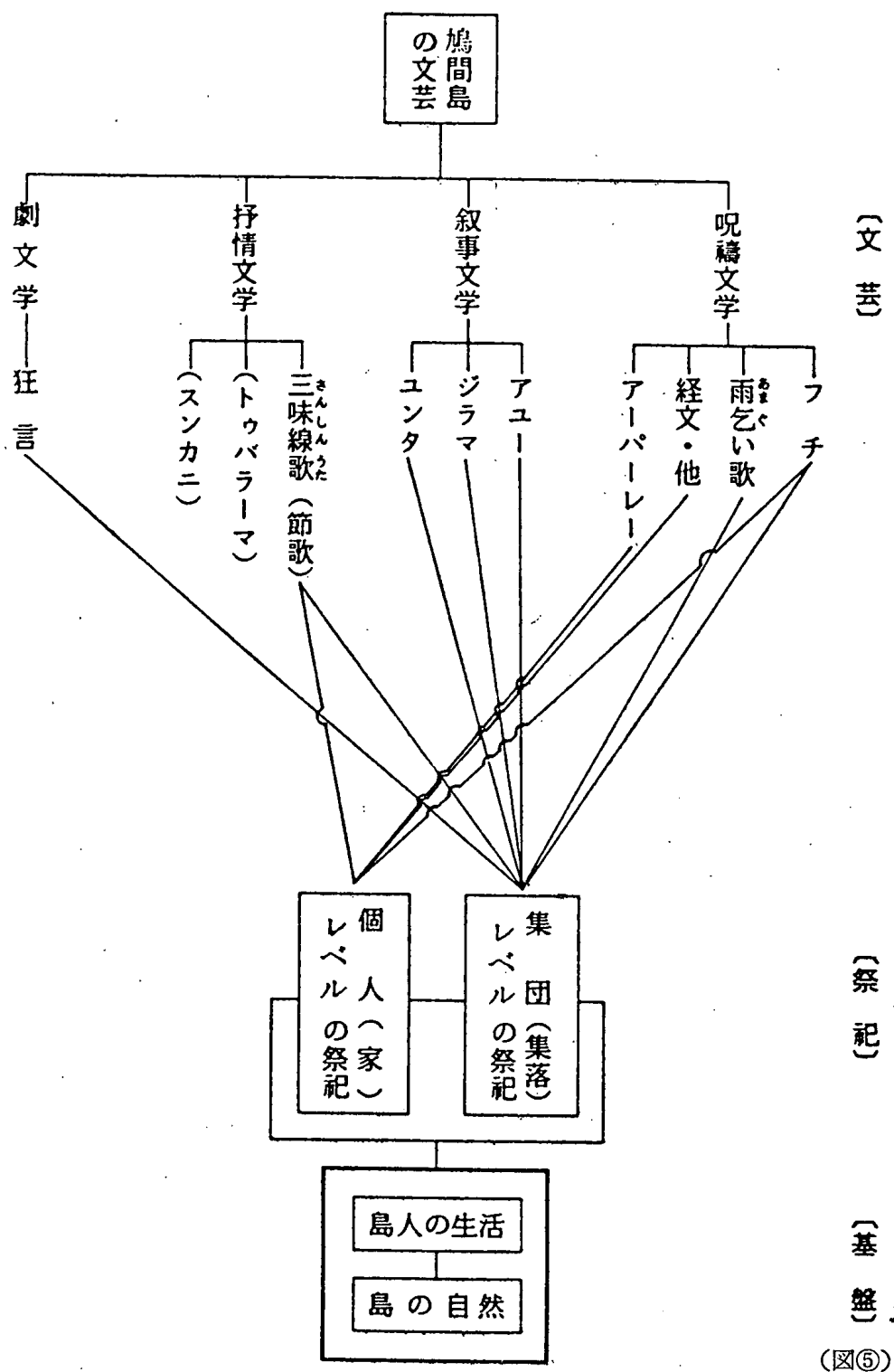
①「じゅーにはー」―十二の方角。十二支による方角のことを意味している。
以上がシチにおける△フチ▽である。

豊年祭には「道^{みち}うた」「さんしきぬうた」「かむらーま」「世^よくいじらま」「世^よあぎじらま」「ぱいみじらま」「あいざむとう」「とうにむとう」「さんばーれー」「ふなむとう」「いじくなー」といった具合に、手拍子や太鼓、ドラを伴奏楽器にして歌う△叙事的歌謡▽が主軸をなしている。「彌勒歌」「まみどーま」「稻^{いね}しり節」「鳩間早節」など三味線や笛を伴奏楽器にして歌う△抒情▽の世界もみることができる。いうまでもなく、△呪禱▽の「フチ」もある。

世願いでは「フチ」「元^{もと}じらま」「稻^{いね}子取りあゆー」など、呪禱・叙事文学が中心である。

ところで、劇文学も含めて、外間守善氏は南島文学（特に、古代文学）を、その形態と発想の側面から、呪詞・呪禱歌謡（呪禱文学）、叙事的歌謡（叙事文学）、抒情的歌謡（抒情文学）、劇文学の四つに分類⁽¹⁰⁾している。

鳩間島の結願祭をはじめ豊年祭、世願い、初願^{はつが}い、二月願^{にんぐわち}い、虫^{むし}ぬ願^{ねが}い、穂^ほぬ精進^{せいじん}、すくまー、八月願^{はちぐわち}い、十月願^{じゆんぐわち}い、種子取^{たなとり}、島^{しま}っさる、結びぬ願^{むす}い、雨乞^{あめが}い等々（以上、集団レベルの祭歌）や、



正月さんぐわちぬ願ねがい、初はつ起くし、火びぬ神かんぬ願ねがい、井か戸いぬ願ねがい、胴どう肌ばた願ねがい、十じゅう六ろく日にち、彼びん岸がん、三さん月ぐわち三さん日にち、たなばた、精せい霊りん会かい、十じゅう五ご夜や、牛うしぬ祝よい（牧まきぬ祝よい）、家や造つくり等々（以上、個人レベルの祭祀）における文芸の実態を、外間氏の分類基準にあてはめて、その構造を体系的に明らかにしてみると、図⑤のようになる。

今回、充分に検討できなかった、たとえば、呪禱文学の母体とでもいうべき八はフチち▽や劇文学の中核をなす八は狂言▽等々の文芸ジャンルを集団レベル、個人レベルの祭祀との関連で整理し、その全貌を明らかにすることによって、鳩間島の文芸の新たな側面がより鮮明になり、内容が一段と充実してくると思われる。

また、伝説や民話など説話の研究もこれからである。

そして、いまひとつ、祭祀以外の日々に歌われる民謡の調査研究もそれに含めることを忘れてはならないであろう。

以上の諸点が今後の研究課題であることを心に留めて本稿を閉じることしたい。

注(1) 伊波普猷・東恩納寛惇・横山重編『琉球史料叢書二』東京美術刊、昭和四十七年

(2) 注(1)に同じ。

(3) 鳩間島では、集落が東村と西村に分かれているように、双分制(Dualism)が形成されていて、祭祀には東西が意識される。特に、豊年祭では、余興(奉納芸能)はすべて東村八雄▽と西村八雌▽で競われ、

爬竜船競漕や綱引きなど、西村が勝てば、その年は島に豊穡がもたらされるといわれている。

(4) 伊波普猷『校注琉球戯曲集』春陽堂刊、昭和四年

(5) 拙論「『長者の大主』考」『沖繩文化』第四十八号所収、沖繩文化協会刊、昭和五十二年

(6) 伊佐川世瑞・世礼国男『^{声楽}工工四』上巻、野村流音楽協会刊、昭和四十六年

(7) 本田安次『南島採訪記』所収、明善堂書店刊、昭和三十七年

(8) 拙論「琉球古典舞踊の基本構想―女踊りを中心に―」『沖繩文化』第五十四号所収、沖繩文化協会刊、

昭和五十五年

(9) 注(6)同書、下巻

(10) 外間守善『南島文学』角川書店刊、昭和五十一年。及び、『南島歌謡大成Ⅳ 八重山篇』角川書店刊、昭和五十四年